孔子の倫理哲学論（1）

—道徳論を中心として—

浅　井　茂　紀

目　次

Ⅰ　序　　論
Ⅱ　本　　論
　第1節　孔子の学
　第2節　孔子の道
　第3節　孔子の徳
　第4節　孔子の善
　第5節　孔子の天
Ⅲ　結　　論

Ⅰ 序　論

論者は，「**孔子の倫理哲学論（1）—道徳論を中心として—**」と題して**論説**する。その目次は前記の如しである。そして，「孔子の倫理哲学論（1）」（以下，この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと，且つ，カントの『純粋理性批判』での「哲学する」(philosophieren)[1]ことや異文化で，宗教上のイエス・キリスト（Jesus Christ）の「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。」（マタイ，5-9)[2]，とあるキリスト教の根本的原理である「愛」(agapê)，これらの認識や意識においても，この論文は，「孔子の倫理哲学論（1）」と題して考察することも可能であろう。

論者は，「孔子の道徳哲学論—四徳（仁，義，礼，知）論を中心として—」[3]，「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」[4]，「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」[5]，などの論説でも，すでに儒教や儒学，孔子や孟子の哲学について多少なりともリサーチ（researches）を実践してきた。従って，今回もそれらのシリーズ（series）として記述する。今回のこの論説は，以前のその「孔子の道徳哲学論」とも関連する。最初に，

1．孔子の学について，学とは何かを問題にする。孔子において，学，学問や学習は，真実よろこびであったと思考する。そして，思索だけで学問しなければ，身の

---

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*,Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865-A838, B866, S.752-753.
カント『純粋理性批判』（下）篠田英雄訳，岩波書店，昭和41年，128ページ，参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書，*The New Testament*』（英和対照）日本聖書刊行会，昭和52年，5ページ。
"Blessed are the peacemakers, for they shall be called sons of God. (Matthew,5-9).

(3) 拙稿「孔子の道徳哲学論—四徳（仁，義，礼，知）論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第42巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2004（平成16）年12月31日発行，1-15ページ。

(4) 拙稿「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」（論説）『千葉商大紀要』第41巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2003（平成15）年12月31日発行，21-37ページ。

(5) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」（論説）『千葉商大紀要』第38巻第2・第3合併号，千葉商科大学国府台学会，2000（平成12）年12月31日発行，57-74ページ。

危険とも見なしている。思索するだけよりも学問を重要視していると言えよう。

2．孔子の道について，道とは何かを問題にする。孔子は，非常に熱心な求道者であったと思われる。その道は，人道であり，誠実と思いやりとも言えよう。

3．孔子の徳について，徳とは何かを問題にする。『論語』では，道だけでなく，徳の単語も散見され，中庸の徳など内容的に，倫理，道徳哲学的な意義が多いと言えよう。但し，「道徳」の熟語は，『論語』や『孟子』書にはなく，荀子の『荀子』書と言えよう。

4．孔子の善について，善とは何かを問題にする。孔子では，善とは，「よい」意味でもあるが，明確な定義が問題となろう。

西洋哲学では，ソクラテス（Sôkratês，470/469-399B.C.）も，美にして善が問題であった。ソクラテスは，善や美に対して，「無知の知」(6)を出発点として真知（epistêmê）への探求を実行した愛知者である(7)。孔子もソクラテスも，彼らの事情や状況は相違するが，善の定義が明確とは言い難いであろう。それに対して，孔子の正当派であり，性善説の孟子（Mencius, 372-289B.C.）は善の定義をしていると言えよう。

5．孔子の天について，天とは何かを問題にする。さらに，天命や天道も，自然，倫理や道徳哲学的な意味が思考されよう。また，孟子における天も，多少触れてみよう。

かくして，中国の春秋時代，聖人・孔子（Confucius，552/551-479B.C.）は，何故これら学，道，徳，善，さらに，天などの倫理（Ethics；Ethik；éthique）や道徳哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学（Ethical philosophy）は，人間としての基本的な理念（Idee）ではなかろうかと，論者は考えるのである。

次に，Ⅱ　本論　第1節　孔子の学から説明する。

---

(6) プラトン著『ソクラテスの弁明・クリトン』（久保勉訳），岩波書店，21ページ。

(7) 拙著『哲学要論』，高文堂出版社，2002（平成14）年4月1日発行，第3節ソクラテス，36ページ。

Ⅱ 本　論

第1節　孔子の学

孔子の学，すなわち，孔子の言う学とは何かを問題にしてみる。

最初に，『論語』の冒頭が，想起(anamnêsis) される。

□□子曰く，學びて時に之を習う，亦説ばしからずや。朋，遠方より來る有り，亦樂しからずや。人知らずして慍みず，亦君子ならずや。(学而１)，(傍点筆者)[8]。

孔子が言うには，学び，学問したことを常に繰り返して学習することは，また，なんと喜悦，喜ばしく，嬉しいことではないか[9]，ということである。

ここでいう，「学」(learn)[10]とは，「学問」の意義である。「習」とは，鳥類の飛ぶ練習と似ていよう。つまり，学問を反復練習する。まさに，学習である。「説」(pleasant)[11]とは，悦と同じ意義である。心の中で，よろこばしく嬉しく思うことであろう。

---

(8) 子曰，學而時習之，不亦説乎。有朋自遠方來，不亦樂乎。人不知而不慍，不亦君子乎。(学而１)，(傍点筆者)。
宋朱子（朱熹）集註『四書集註』香港太平書局，1964年，論語巻之一，学而第一，１ページ。宋朱子（朱熹）集注『四書集注』台湾中華書局，中華民國66年，論語巻之一，学而第一，１ページ。慧豐學會『漢文大系』(一)，新文豐出版公司，中華民國83年，論語集説，巻１，学而第１，１ページ。四部叢刊経部。『漢文大系』壹（大學説，中庸説，論語集説，孟子定本)，冨山房，明治43年，論語集説，巻１，学而第１，１ページ。

(9) 吉田賢抗『論語』(新釈漢文大系，第１巻）明治書院，昭和35年，13ページ。

(10) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS*, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIUS, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.137. レッグは，この書（*THE CHINESE CLASSICS*）で，『論語』(CONFUCIAN ANALECTS）の冒頭を以下の如く訳している。
The Master said,'Is it not pleasant to learn with a constant perseverance and application?
'Is it not delightful to have friends coming from distant quarters?
'Is he not a man of complete virtue, who feels no discomposure though men may take no note of him? 従って，この「学」を learn，と訳している。

『論語』２０篇（学而１から堯曰２０まで）の冒頭にこのような文章が記載されていることは，孔子も非常に「学」，つまり，学問を重要視して，且つ，よく学習を実践した人物といえよう[12]。聖人・孔子もよく学習したのであるから，私達も大いに学習することが望ましいのではなかろうか。それでは，何を学ぶのかというと，孔子では，先哲の詩経や書経，礼や楽を学び実践することであったであろうが，さらに，種々の知識はもとよりのことだが，学の本質は，哲学の語源が，フィロソフィア（philosophia），すなわち，愛知に由来するように，真実の知恵や真理探求でもあろうと[13]，論者は思考する。次に，

□□子曰く，學びて思わざれば則ち罔（くら）し。思いて學ばざれば則ち殆（あやう）し。（為政２），（傍点筆者）[14]。さらに，

□□子曰く，默（もく）して之を識し，學びて厭（いと）わず，人を誨（おし）えて倦（う）まず。何か我に有らんや。（述而７），（傍点筆者）[15]。また，

□□子曰く，吾嘗て終日食わず，終夜寝ず，以て思う。益無し。學ぶに如（し）かざるなり。（衛霊公１５），（傍点筆者）[16]，などによっても，儒家の祖・孔子が，いかに学問を好み，学問を重要視して，学問，哲学に価値を置いたかが判明し理解できるのである。

---

(11) 注(10)参照。*ibid.*,p.137.
なお，渋沢栄一（実業家）の『渋沢栄一「論語」の読み方』（編・解説竹内均，三笠書房，2004年，pp.18-19.）では，『論語』は，自分の体の中へ叩き込んで実践した「最高智」で，「悦」は，「よろこばしいことだ」としている。

(12) 拙著『哲学の原理』（改訂版），高文堂出版社，1987（昭和62）年７月７日，227-243ページ。

(13) 注(7)参照。拙著，前掲書（『哲学要論』），13-16ページ。

(14) 子曰，學而不思則罔。思而不學則殆。（為政２），（傍点筆者）。

(15) 子曰，默而識之，學而不厭，誨人不倦。何有於我哉。（述而７），（傍点筆者）。
孔子が言うには，「学問したことを黙って心に記しきざんで憶え忘れないようにし，学問して飽きることがない。さらに，自分が体得したことを人にさとしおしえて飽きることがない。何かこれ以外に自分には取り柄もない。この三つだけが自分の為しえることに過ぎない，との事である。学問の重要性，価値が内包されていよう。
なお，『論語』では，「人を誨えて倦まず」であるが，翻って，「教育」の熟語となると孟子の『孟子』書に由来する。
拙著『教育哲学要論』，高文堂出版社，2002（平成14）年４月１日発行，14-15ページ。

(16) 子曰，吾嘗終日不食，終夜不寝，以思。無益。不如學也。（衛霊公１５），（傍点筆者）。

それでは，なぜ学ぶのかというと，孔子では，それは，よろこびであり，道理に明るくなる理由としている。反対に，学ばなければ，道理にくらくなり，さらに，「殆し」，すなわち，危険とさえ強調しているのである。

次に，性善説の孟子の学について，

□□乃ち願う所は，則ち孔子を學ばん，と。(公孫丑上)[17]。孟子は，聖人の中でも，願わくば，孔子の学，倫理学（Ethics）や哲学（Philosophy）を学ぶことにあると言う。

ゆえに，孔子の学では，「學びて時に之を習う，亦説ばしからずや。」(学而１)，さらに，「學びて厭わず。」(述而７）や「學ぶに如かざるなり。」(衛霊公１５)，などとある如く，学，学問や学習は，喜悦，よろこびである。孔子は，学問を厭わず，学問だけで思索しなければ道理にくらいが，思索だけで学問しなければ「殆し」(為政２)，身の危険としている。聖人・孔子は，学問や学習，哲学（philosophia；Philosophy）に多大な価値を置くのである。

また，亜聖・孟子の学は，「乃ち願う所は，則ち孔子を學ばん，と。」(公孫丑上)とある如く，孔子の学，すなわち，倫理学（Ethics）や哲学（Philosophy）などを学ぶことでもあると，論者は考えるのである。

第２節　孔子の道

孔子の道とは何かを問題にしてみる。『論語』に記載されている道をみてみよう。

□□子曰く，朝に道を聞けば，夕べに死すとも可なり。(里仁４)，(傍点筆者)[18]。

孔子が言う，もし朝に人の道を聞くことができたならば，仮にその夕方に死んだとしても，可能である。

孔子の言う，この節での「道」は，人の道，すなわち，人道であろう。この「道」

---

(17) 乃所願，則學孔子也。(公孫丑上)。

(18) 子曰，朝聞道，夕死可矣。(里仁４)，(傍点筆者)。
注(10)参照。James Legge, *op. cit.*, p.168.
The Master said, "If a man in the morning hear the right way, he may die in the evening without regret.

は，孔子にとって最高の目的（aim），最高善（highest good）[19]であり，理想と言えよう。

孔子は，もし短い時間でも真実，人道を聞いたならば，死すとも可能であり，よいとして全生命を投げ出すことも厭わないとする発想である。

従って，孔子が，いかに強烈な求道者であったか，この里仁第４の１節だけでも理解できよう。けれども，聖人・君子である孔子でさえ，この「道」を聞くことが困難であったわけだから，一般の人々にとっては，実際，この倫理的な道の意味する内容，真実在の認識と把握，体得はより困難といっても過言ではなかろう。但，一般的に，人の道，人道（humanity）は，正しい道（the right way）[20]であり，真理（truth；veritas）であり，根本的原理であろう。また，孔子の倫理哲学における道は，孟子の倫理哲学においては，人倫[21]や五倫と言えよう。

さらに，孔子の道，並びに，夫子の道について，

□□子曰く，參や，吾が道は一以て之を貫くと。曾子曰く，唯（い）と。子出づ。門人問いて曰く，何の謂ぞやと。曾子曰く，夫子之道は，忠恕のみと。（里仁４）[22]。

孔子は，自分の道には，一貫した原理があると言うのである。

親孝行の門人・曾子（曾参）の言ったことから判断すると，孔子の道は，「忠恕」，すなわち，誠実と思いやりだけということになるのである。忠とは，誠実であり，恕とは，思いやりの意味である。なお，先述の「朝に道を聞けば」とある，孔子自身がその「道」自体を聞きたいことと，この門人曾子（曾参）の言う，「夫子之道」，すなわち，孔子先生の道とは，対象と事柄の相違があろう。孔子の道，すなわち，一貫の原理とは，孔子の方針や理念，彼の倫理，道徳哲学を全体的に集約した人格的な内容とも言えよう。

---

(19) 注(7)参照。拙著，前掲書（『哲学要論』），45ページ。アリストテレスは，最高善を主張した。最高善（ariston；highest good；höchstes Gut）は，幸福でもある。

(20) 注(10)参照。James Legge, *op. cit.*, p.168.

(21) 拙稿「孟子の人倫哲学論—五倫について—」（論説）『千葉商大紀要』第32巻第３号，千葉商科大学国府台学会，1994（平成６）年12月30日発行，1-19ページ。
孟子の人倫や五倫の内容については，
聖人有憂之。使契爲司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。（滕［とう］文公上），（傍点筆者），とある。

(22) 子曰，參乎，吾道一以貫之。（中略）。曾子曰，夫子之道，忠恕而已矣。（里仁４）。

□□子曰く，道の將に行われんとするや命なり。(憲問１４)[23]。
孔子は，道がまさに行われることも天命と認識し悟っている。次に，孟子の道について，
□□學問の道は他無し。其の放心を求めるのみ，と。(告子上)[24]。

孟子は，学問の道は，外でもない。その放逸した本心を取り戻そうと求めるのみである，と。

ゆえに，孔子の道では，「朝に道を聞けば，夕べに死すとも可なり。」(里仁４)，とある如く，人の道，人道である。この「道」は，孔子自身にとって最高の目的，最高善であり，理想と言えよう。孔子が，強烈な求道者であったことは明晰判明である。さらに，孔子の道は，一貫の原理があり，門人・曾子によれば，それは「忠恕」(里仁４）である。つまり，孔子の道は，倫理，道徳的な人道であり，誠実と思いやりである。また，孔子は，道が行われることも天命と認識していたと言えよう。

次に，性善説の孟子の道については，「學問の道は他無し。其の放心を求めるのみ，と。」(告子上）とある如く，孟子では，学問の道は，本心を取り戻すことなどであると，論者は考えるのである。

第３節　孔子の徳

孔子の徳とは何かを問題にしてみる。『論語』に記載されている徳をみてみよう。
□□子曰く，政を爲すに徳を以てするは，譬えば北辰の其の所に居て，衆星の之に共するが如し。(為政２)，(傍点筆者)[25]。

孔子が言うには，政治には徳が肝要ということである。この徳（virtue）は，内容としては，道徳であろう。北辰とは，北極星である。
□□子曰く，之（これ）を道（みちび）くに政を以てし，之を齊（ととの）えるに刑を以てすれば，民免（まぬか）れて恥じること無し。之を道くに徳を以てし，之

---

(23)　子曰，道之將行也與命也。(憲問１４)。
(24)　學問之道無他。求其放心而已矣。(告子上)。
(25)　子曰，爲政以徳，譬如北辰居其所，而衆星共之。(為政２)，(傍点筆者)。

を齊えるに禮を以てすれば，恥有りて且つ格（いた）る。（為政２），（傍点筆者）[26]。

孔子は，民を導くには，禁令や刑罰ではなく，道徳で導くべきと配慮する。民を統制するには，倫理，道徳的な礼儀を教えて，羞恥心，恥じ意識で善に至らすべきだとする。

この節の「道」は，導くと読み，道と徳は，熟語ではないが，これも道徳と言えよう。

□□子曰く，君子は徳を懐い，小人は土を懐う。云々。（里仁４）[27]。

孔子が言う，君子は徳行を修めることを思い，小人は安住の土を思う，などとある。

□□子曰く，徳孤ならず，必ず鄰あり。（里仁４）[28]。孔子が言う，有徳者は孤立せず，必ず共鳴する隣人がある。つまり，道徳的な善徳や美徳の影響力であろう。

□□子善を欲すれば民善なり。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を尚（くわ）えれば必ず偃（ふ）す。（顔淵１２），（傍点筆者）[29]。君子の徳と一般の小人の徳とは比重の相違がある。同様の文章は，『孟子』［滕（とう）文公上］[30]にも有る。

□□子曰く，中庸の徳たるや，其れ至れるか。民鮮（すくな）きこと久しと。（雍也６）[31]。

孔子が言う。中庸の徳というものは，最上至極としている。すでに，久しい間，中庸の徳を主張する人が少ないことは嘆かわしい，と。この中庸の徳は，道徳を意味する。聖人・孔子は，中庸の道徳の価値は最上至極としている[32]。

---

(26) 子曰，道之以政，齋之以刑，民免而無恥。道之以徳，齋之以禮，有恥且格。（為政２），（傍点筆者）。

(27) 子曰，君子懐徳，小人懐土。君子懐刑，小人懐惠。（里仁４）。

(28) 子曰，徳不孤，必有鄰。（里仁４）。

(29) 子欲善而民善矣。君子之徳風。小人之徳草。草尚之風必偃。（顔淵１２），（傍点筆者）。

(30) 君子之徳，風也。小人之徳，草也。草尚之風必偃。是在世子。（滕文公上）。

(31) 子曰，中庸之爲徳也，其至矣乎。民鮮久矣。（雍也６）。

(32) 注(15)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』），143ページ。
アリストテレス（Aristotelês；Aristotle,384-322B.C.）も，テオーリア（theôria=観照，観想）はもとより，中庸（mesotês）にも価値を置いている。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』では，恐怖と平然に関しては，勇敢がその中庸である。その他，節制，気前，豪華，矜持，温和，真実，機知，親愛，羞恥，義憤，正義（分配的正義，是正的正義），などが中庸として存在する。

次に，孟子の徳について，

□□徳を以て仁を行う者は王たり。(公孫丑上)[33]。

孟子は，徳の心で以て仁愛の政策や政治を実行するのは王者である，と言う。

□□徳を以て人を服する者は，中心悦びて誠に服するなり。(公孫丑上)[34]。

孟子は，力ではなくして徳で人を服する者は，心から喜んで誠に服する，と述べている。

さらに，荀子の規範的な道徳について，

□□禮は法の大分，羣類の綱紀なり。故に學は禮に至りて止どまる。夫れ是を之れ道徳の極と謂う。(『荀子』勧学１)[35]。

学は礼法の体得でもある。儒家の荀子著『荀子』書の中に「道徳」の熟語が存在する。『論語』や『孟子』書にも「道徳」の熟語は無く，今日の「道徳」の漢字・熟語のルーツ，根源は，性悪説の荀子であると[36]，論者は考える。

ゆえに，孔子の徳では，道徳や徳行の意味で価値を置く。孔子の言葉，「朝に道を聞けば，夕べに死すとも可なり。」(里仁４）や，「中庸の徳たるや，其れ至れるか。民鮮きこと久しと。」(雍也６）などでわかる。

また，孟子の言葉，「徳を以て人を服する者は，中心悦びて誠に服するなり。」(公孫丑上）などにも道や徳の単語は散見され，「道徳」の熟語は無いが，内容的に，倫理，道徳的な意義が多い。

なお，「道徳」の熟語の語源は，荀子の言葉，「禮は法の大分，羣類の綱紀なり。故に學は禮に至りて止どまる。夫れ是を之れ道徳の極と謂う。」(『荀子』勧学１）に由来すると，論者は考えるのである。

---

(33) 孟子曰，以力假仁者霸。霸必有大國。以徳行仁者王。王不待大。(公孫丑上)，(傍点筆者)。

(34) 以徳服人者，中心悦而誠服也。(公孫丑上)。

(35) 禮者法之大分，羣類之綱紀也。故學至乎禮而止矣。夫是之謂道徳之極。(勧学１)，(傍点筆者)。
藤井専英『荀子（上)』(新釈漢文大系，第５巻）明治書院，昭和42年，30ページ。

(36) 注(15)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』)，104ページ。

第４節　孔子の善

孔子の善とは何かを問題にしてみる。『論語』に記載されている善をみてみよう。

□□善を擧げて不能を教えれば則ち勸むと。（為政２），（傍点筆者）[37]。

善行の者は挙げて賞賛し，無能者は教導すれば，民は業務に励むと孔子は述べている。

□□子韶を謂う，美を盡せり。又善を盡せり。武を謂う，美を盡せり。末だ善を盡せざるなり。（八佾［いつ］３），（傍点筆者）[38]。孔子は，舜の音楽である韶を「美を尽くし，又善を尽くしている」と言い，武王の音楽を「美を尽くしてはいるが，未だ善を尽くしていない」と言った。聖王・舜の音楽は平和的な音色であり，武王の音楽は武力的な音色であった原因である。舜の音楽は善美を尽くしているので善には平和的要素が大事である。

□□子善を欲すれば民善なり。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を尚（くわ）えれば必ず偃（ふ）す。（顔淵１２），（傍点筆者）[39]。

孔子は，魯の大夫である季康子の政治の質問に対して，「もし季康子自身が，まず自分から善を欲したならば民も自ずから善の道に赴くことでしょう。云々」と答えている。

□□如（も）し其れ善にして之に違うこと莫きや，亦善（よ）からずや。如し不善にして之に違うこと莫きや，一言にして邦を喪ぼすに幾（ちか）からずやと。（子路１３）[40]。

孔子は，魯の君主・定公の国家興隆の質問に，「もし善いことを言って，反対する者が無いのを愉快というのは善い。」と答え，逆に，もし悪いことを言って，反対する者が無いのを愉快というのは，その一言こそ，国家滅亡に近いと言えようかとしている。

□□孔子曰く，益者三樂，損者三樂あり。禮樂を節することを樂しみ，人の善を道

(37) 擧善而教不能則勸。（為政２），（傍点筆者）。

(38) 子謂韶，盡美矣。又盡善也。謂武，盡美矣。未盡善也。（八佾［はちいつ］３）。

(39) 注(29)参照。

(40) 如其善而莫之違也，不亦善乎。如不善而莫之違也，不幾乎一言而喪邦乎。（子路１３）。

（い）うをことを樂しみ，賢友多からんことを樂しむは益なり，云々。（季氏１６）[41]。孔子の益を得る三楽の一つは，人の善言善行を噂し評価することを楽しむことである。なお，孟子にも，「君子の三楽」[42]がある。『論語』の孔子の善（agathon；good；Gute；bien）は，「よい」，「よく」などの意味である。

次に，性善説の孟子の善について，

□□孟子性善を道（い）い，言えば必ず堯・舜を称す。（滕［とう］文公上）[43]。

□□浩生不害問うて曰く，樂正子は何人ぞや，と。孟子曰く，善人なり，信人なり，と。何をか善と謂い，何をか信と謂う，と。曰く，欲す可き之を善と謂い，諸を己に有する之を信と謂い，充實せる之を美と謂い，充實して光輝有る之を大と謂い，大にして之を化する之を聖と謂い，聖にして之を知る可からざる之を神と謂う。（尽心下），（傍点筆者）[44]。

斉の人・浩生不害が孟子に対して，彼の弟子・樂正子について質問した。

この節に，善，信，美，大，聖，神の６つの概念と定義が記載されている。

つまり，孟子は，善については，「欲すべき」と定義しているのである。

いわば，人々皆が欲するものと言える。ソクラテスは，当初，善美の意味は「無知の知」であったことから言えば，孟子の善，信，美，大，聖，神の６つの定義は偉大であろう。

ゆえに，孔子の善では，「子善を欲すれば民善なり。」（顔淵１２）などの節と事柄により，善（agathon；good；Gute；bien）とは，「よい」とか，「よく」などの意味であるが，善自体の定義はない。

---

(41) 孔子曰，益者三樂，損者三樂。樂節禮樂，樂道人之善，樂多賢友益矣。樂驕樂，樂佚遊，樂宴樂損矣。（季氏１６）。

(42) 注(15)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』），14ページ。孟子にも，「君子の三楽」がある。
孟子曰，君子有三樂。而王天下，不與存焉。
父母俱存，兄弟無故，一樂也。仰不愧［はじ］於天，俯不怍［はじ］於人，二樂也。得天下英才，而教育之，三樂也。君子有三樂。而王天下不與存焉。（尽心上），（傍点筆者）。また，ここに，孟子における「教育」の漢字・熟語が存在する。

(43) 孟子道性善，言必稱堯・舜。（滕［とう］文公上）。

(44) 浩生不害問曰，樂正子何人也。孟子曰，善人也，信人也。何謂善，何謂信。曰，可欲之謂善，有諸己之謂信，充實之謂美，充實而有光輝之謂大，大而化之之謂聖，聖而不可知之之謂神。（尽心下），（傍点筆者）。

それに対して，儒家・孔子の正当派であり，性善説の孟子は，善，信，美，大，聖，神の６つの概念の中で，善とは，「欲すべき」，すなわち，「人々皆が欲するもの」と定義していると，論者は考えるのである。

第５節　孔子の天

孔子の天とは何かを問題にしてみる。『論語』に記載されている天をみてみよう。

□□子曰く，天何をか言わんや，四時行われ，百物生ず。天何をか言わんやと。（陽賀１７），（傍点筆者）[45]。

孔子が言う，天は何か言うかな，何も言わないが，四時，すなわち，春夏秋冬は運行して，鳥獣草木などの百物は生長している。これすべて天の偉大な法則であるが，天は何も言わないではないか，と。つまり，この天は，宇宙における地球上の四季の運行や鳥獣草木などの生物の生長を担うものとしての自然的な天の意味であろう。孔子の自然哲学思想としての天（Heaven）の概念である。

□□子曰く，天徳を予に生ぜり。桓魋（かんたい）其れ予を如何せん。（述而７），（傍点筆者）[46]。天が徳を自分に授け生じた。この天は，倫理，道徳的な天の意味であろう。

□□子曰く，天を怨みず，人を尤（とが）めず。下學して上達す。我を知る者は其れ天かと。（憲問１４）[47]。孔子は，天を怨まず，他人をとがめることもなかった。手近なことを学んで，徐々に崇高なことまで悟るようになった。孔子は，天だけは孔子自身の学識と人格を知ってくれると思っていた。この天も，倫理的で道徳哲学的な天の意味である。

□□顔淵死す。子曰く，噫（ああ）天予（われ）を喪ぼせり，天予を喪ぼせりと。（先進１１）[48]。弟子中ピカ一優秀な顔淵（顔回）の死去によって，孔子は，天が自分を亡ぼしたと繰り返し慨嘆する。この天も，擬人的，倫理，道徳的な天の意味で

---

(45) 子曰，天何言哉，四時行焉，百物生焉。天何言哉。（陽賀１７），（傍点筆者）。

(46) 子曰，天生徳於予。桓魋［かんたい］其如予何。（述而７）。

(47) 子曰，不怨天，不尤人。下學而上達。知我者其天乎。（憲問１４）。

(48) 顔淵死。子曰，噫天喪予，天喪予。（先進１１）。

ある。かくして，孔子の天は，自然，倫理，道徳哲学的な意味が存在する。

次に，孔子の天命について，

□□五十にして天命を知る。六十にして耳順う。（為政２）[49]。孔子は，五十歳で天命を知った。

□□死生命有り，富貴天に有り。（顔淵１２）[50]。司馬牛の悩みに対して，兄弟子の子夏が孔子の言葉を引用して，人間の死生も富貴も天命（the Decrees of Heaven）で有り，人の力ではどうにもならないこともあるといって慰めたようである。

□□孔子曰く，君子に三畏有り。天命を畏れ，大人を畏れ，聖人の言を畏る。（季氏１６）[51]。君子の三畏敬の一つに天命，即ち，天の命令がある。

次に，孔子の天道について，

□□子貢曰く，夫子の文章は，得て聞く可きなり。夫子の性と天道とを言うは，得て聞く可からざるなり。（公冶長５）[52]。

子貢が言う，孔子先生の文章（国家の礼楽制度や道徳）は，常に拝聴できたが，孔子先生の「性」と「天道」（the Way of Heaven）論を聞くことは稀で容易に聞くことができない。孔子自身は，天命は認識したが，天道について殆ど語らなかったと言えよう。

次に，性善説の孟子の天（Heaven）や天命，天道について，

□□天の高きや，星辰の遠きや，いやしくも其の故を求むれば，千歳の日至も，坐して致す可きなり，と。（離婁下）[53]。この天は，自然の天の意味であろう。

□□天命は，常靡（な）し。（離婁上）[54]。天命は，常に定まっているとは限らない。

□□聖人の天道に於けるや，命なり。性有り，君子は命と謂はざるなり，と。（尽心下）[55]。

孟子は，天道に対する聖人のあり方として，必ずしも聖人達が完全に行為できないのは天命であるとした。孟子の天道や天命も倫理，道徳哲学的な意義が存在す

(49) 子曰，吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲，不踰矩。（為政２），（傍点筆者）。

(50) 死生有命，富貴在天。（顔淵１２）。
司馬牛と子夏との対話中，兄弟子の子夏が孔子の言葉として引用したものである。

(51) 孔子曰，君子有三畏。畏天命，畏大人，畏聖人之言。（季氏１６）。

(52) 子貢曰，夫子之文章，可得而聞也。夫子之言性與天道，不可得而聞也。（公冶長５）。

(53) 天之高也，星辰之遠也，苟求其故，千歳之日至，可坐而致也。（離婁下）。

る[56]。

ゆえに，聖人・孔子の天では，孔子の天や天命，天道は，自然や倫理，道徳哲学的な意味と中身が内包されている。

このことは，事柄の相違はあっても，同様に，亜聖・孟子の天，天命や天道でも自然や倫理，道徳哲学的な意義があろうかと，論者は考えるのである。

Ⅲ　結　　論［孔子の倫理哲学論（1）—道徳論を中心として—］

論者のこの論説，「孔子の倫理哲学論（1）—道徳論を中心として—」における結論としては，次のようになろう。まず，第1節から第5節までの各節について，［1］**孔子の学**では，「學びて時に之を習う，亦説ばしからずや。」（学而1），さらに，「學びて厭わず。」（述而7）や「學ぶに如かざるなり。」（衛霊公15），とある如く，学，学問や学習は，よろこびである。孔子は，学問を厭わず，思うよりも学問することに重点を置いた。学問だけで思索しなければ道理にくらいが，思索だけで学問しなければ，「殆し」（為政2），身の危険と彼は主張している。聖人・孔子は，学問や学習，哲学（philosophia；Philosophy）に多大な価値を置いたのである。

次に，亜聖・孟子の学は，「乃ち願う所は，則ち孔子を學ばん，と。」（公孫丑上）とある如く，孔子の倫理学（êthos；Ethics）や哲学（Philosophy）を学ぶことで

---

(54) 詩云，商之孫子，其麗不億。上帝既命，侯于周服，侯服于周。天命靡常。（離婁上），（傍点筆者）。
この節は，孟子が，『詩経』を引用して「天命」を説明している。
ところで，明治期の小説家・樋口一葉（1872-1896）の『たけくらべ』（和田芳恵編『近代文学鑑賞講座，第3巻，樋口一葉』，角川書店）の作品中に「孟子の母やおどろかん上達の速やかさ」とあるように孟子の母についての記述がある。つまり，孟母三遷の教えの話や孟母断機の戒めの話（前漢の劉向『列女伝』）で有名な亜聖・孟子の賢母の記載がある。これら孟母三遷の教えや孟母断機の戒めの話（劉向『列女伝』）に関しては，拙稿「孟子の略伝について—経歴と哲学—」（論説）『千葉商大紀要』第36巻第3号，千葉商科大学国府台学会，1998（平成10）年12月30日発行，47-70ページ，参照。

(55) 聖人之於天道也，命也。有性焉，君子不謂命也。（尽心下），（傍点筆者）。

(56) 拙稿「孟子の天道哲学論—孔子と孟子の天，天命と天道—」（論説）『千葉商大紀要』第35巻第1号，千葉商科大学国府台学会，1997（平成9）年6月30日発行，23-41ページ。

もあると，論者は思考するのである。

［2］**孔子の道**では，「朝に道を聞けば，夕べに死すとも可なり。」（里仁４），とあるように，人の道，人道である。この「道」は，孔子自身にとって最高の目的，最高善であり，理想と言えよう。孔子が，強烈な求道者であったことは明晰判明である。さらに，孔子の道は，一貫の原理があり，門人・曾子によれば，それは「忠恕」（里仁４）である。つまり，孔子の道は，倫理，道徳的な人道であり，誠実と思いやりである。また，孔子は，道が行われることも天命と認識していたと言えよう。

次に，性善説の孟子の道は，「學問の道は他無し。其の放心を求めるのみ，と。」（告子上），とある如く，学問の道は，本心を取り戻すことなどであると，論者は思考するのである。

［3］**孔子の徳**では，道徳や徳行の意義である。孔子の言葉，「朝に道を聞けば，夕べに死すとも可なり。」（里仁４）や，「中庸の徳たるや，其れ至れるか。民鮮きこと久しと。」（雍也６）などでわかる。また，孟子の言葉，「徳を以て人を服する者は，中心悦びて誠に服するなり。」（公孫丑上）などにも，道や徳の単語は散見され，「道徳」の熟語は無いが，内容的に，倫理，道徳的な意義が多い。

なお，規範的な「道徳」の熟語の語源は，荀子の言葉，「禮は法の大分，羣類の綱紀なり。故に學は禮に至りて止どまる。夫れ是を之れ道徳の極と謂う。」（『荀子』勧学１）に由来すると，論者は考えるのである。

［4］**孔子の善**では，「子善を欲すれば民善なり。」（顔淵１２）などの節と事柄により，善（agathon）とは，「よい」とか，「よく」などの意味であるが，善自体の定義はない。それに対して，儒家・孔子の正当派，性善説の孟子は，善，信，美，大，聖，神の６つの概念の中で，善とは，よい意味はもとより，「欲すべき」，すなわち，「人々皆が欲するもの」と定義していると，論者は考えるのである。

［5］**孔子の天**では，聖人・孔子の天や天命，天道は，自然や倫理，道徳哲学的な意味と中身が内包されている。このことは，事柄の相違はあっても，同様に，亜聖・孟子の天や天命，天道でも，自然や倫理，道徳哲学的な意義があろうかと，論者は思考するのである。

ところで，なぜ孔子は，これら学，道，徳，善，さらに，天などの倫理，道徳哲学を主張したのかが問題であろう。

先ず，それは古代中国，周の春秋時代の状況とも関連して，聖人・孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に，春秋時代は，迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり，孔子は，周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた周公旦を理想的な人物として，

□□子曰く，甚だしいかな，吾が衰（おとろ）えたるや。久しいかな，吾復（また）夢に周公を見ず。（述而７）[57]，

と嘆いた如く，孔子は，政策的に善き国家建設のビジョン（Vision）を持ち，その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。

そのことは，前回の論説における仁，義，礼，知，また，信や愛の哲学はもとより[58]，今回の論説におけるこれら学，道，徳，善，さらに，天などの孔子の倫理，道徳哲学は，人間としての基本的な理念（Idee）であり，眼目であったと，論者は思考するのである。

さらに，論者のこの論文，「**孔子の倫理哲学論（１）**」では，ロゴス（logos）的に体系化（systematization）して，その中身を「哲学する」（philosophieren）[59]ことを試みた。

よって，このような内容により，論者の「**孔子の倫理哲学論（１）―道徳論を中心として―**」［Confucius' Philosophical Theory of Ethics (1)-Attaching Importance to His Theory of Morality-］の**論説**は，過去，現在，未来の三世に渡り，多少なりとも意義と価値があろうかと，論者は考えるのである。

……｛２００５（平成１７）年８月８日（月曜日），原稿提出｝……

---

(57) 子曰，甚矣，吾衰也。久矣，吾不復夢見周公。（述而７），（傍点筆者）。

(58) 注(3)参照。拙稿，前掲論文（「孔子の道徳哲学論」），1-15ページ。

(59) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865-A838, B866, S.752-753.